

《書評》

川本隆史編『ケアの社会倫理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ』

馬 上 美 知

本書『ケアの社会倫理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ』（有斐閣選書、2005年8月刊）は、その主題形成に阪神・淡路大震災を重要な契機の一つとして持ち、震災からちょうど10年目の区切りに公刊となった。編者はあとがきにおいて、執筆者に執筆依頼をしてから出版に漕ぎ着けるまでに長い期間（3年！）かかってしまったことを深く詫びている。しかし、むしろ震災から「ちょうど10年目」の出版であったからその吸引力が、本書にはあったように思われる。

「ケアの社会倫理学」

「ケア」という言葉も、また「社会倫理学」という言葉も見たり聞いたりすることは良くある。しかし、本書の主題である「ケアの社会倫理学」という言葉は、評者にとって初めて見るものだった。というより、キャロル・ギリガンの『もうひとつの声』から、「正義」を中心とした社会倫理に等値される「ケア」を中心とする社会倫理を学び、それに強い印象を得た評者は、ケア＝社会倫理というように、「ケア」とはすなわち社会倫理のことであると理解していた（思い込んでいた）。そのため、「ケアの社会倫理学」というタイトル自体に、まずはとても興味をひかれた。もう少し正直に言うと、意味がなんだかよく分からなかった。

では「ケアの社会倫理学」とは何なのか。編者による本書編纂の背景と目的を読む事で、その意味するものがすっきりと目の前に開けてくる。

川本は、「ケアの社会倫理学」という主題を思いついた背景として、三つの事を上げている。まず一つ目は、先ほども出てきたキャロル・ギリガンの『もうひとつの声』である。大学院生の時からジョン・ロールズの『正義論』に始まる活発な論争を追いかけていた川本は、「〈何が正義にかなうのか〉という

問いに主導される「正義の倫理」と〈他者のニーズにどのように応答すべきか〉にこだわる「ケアの倫理」の対比は、きわめて衝撃的だった」と言う。そして、「正義一辺倒の態度を見直して、「ケアの倫理」が理想とする人間関係——「誰もが他人から応えられ仲間に入れてもらえ、一人ぼっちで置き去りにされ傷つけられるような人はいない」——「非暴力」への志向に深く共鳴する」ようになり、「正義を「正しい・まともな」という形容詞に差し戻すことによって、「まともなケア」あるいは「ケアの正しい分かち合い」をサポートする「後ろ盾となる諸制度」を探り当てるという主題を自らに課した」ことが、本書主題の基盤となっている。

こうしたギリガンとの出会いによって見出だされた「制度」を探求しようとする問題意識は、阪神・淡路大震災と、その後の「心のケア」ブームによってさらに強く動機付けられる。川本は、「ケアする人へのケア」の大切さを知り、被災者の救護活動に挺身した精神科医、安克昌による「「心の傷を癒すということ」は、精神医学や心理学に任せてすむことではない。それは社会のあり方として、今を生きる私たち全員にとわれている」、「専門家の心のケアを超えて、政策の立案という次元から隣人への気遣いという次元まで、さまざまなレベルでの『ケア』を考え、実現することが必要なのだ」という訴えに共感し、震災の6年後に亡くなった安の訴えに応答していこうとするのである。それが本書主題の二つ目の背景となる。

三つ目は、川本自身の母親の介護経験である。川本は、「女子大教師時代にギリガンを知って、ケアへの理論的な興味は芽生えていた。だがケアの営みに実践的な関心を抱くようになったのは母を通じてだった」とし、母親の介護経験を通して、実践面でのケアの営みへも関心の幅を広げていったことを記している。

さて、以上のような問題関心に基づいて川本は、まずは「ケアと社会のつながりをめぐる問題複合 (problematique)」を描き出すことで、「ケアの実践と理論を架橋する《ネットワークング》」を開こうとする。方法としては、ケアと社会のインターフェイス (界面) である医療・看護・介護の営みを「[ケア]という視点から統一的かつ批判的に把握し、ケアされる人 (患者や高齢者) 対ケアする人 (医師、看護師、介護者) の関係だけでなく、それを取り巻く家族、地域社会、さらに政治や経済、文化まで視野に収め」ることを目指し、教育においては「[学校における生命倫理教育]を再点検する」という視覚から取り組もうとする。

精神医学や心理療法の技法に集中してしまう「心のケア」でもなく、ケアを専門職とする人々の職業倫理や心構えに回収されがちな「ケアの倫理」でもなく、「ケアと社会とのあり方」を問うていきたい。それが「ケアの社会倫理学」である。

4 つのテーマ

本書は、実践家と研究者の論考を交差させながら展開されている。

本書の構成は次の通りである。

序論《ケアの社会倫理学》への招待

I 医療とケア

第1章 子ども・医療・ケア

第2章 高齢者医療とケア

第3章 ケアとしての医療とその倫理

II 看護とケア

第4章 実践知としてのケアの倫理

第5章 感情労働としてのケア

第6章 臨床哲学とケア

III 介護とケア

第7章 介護の町内化とエロス化

第8章 ケアの淵源

第9章 介護とジェンダー

IV 生命倫理教育への反省

第10章 生面倫理教育の反省

第11章 学校で話したこと

第12章 生と死の語り方

本書の4つのテーマに沿いつつ、以下簡単にその内容を評者の興味関心のおもむくままにまとめることで、紹介としたい。

第I部の「医療とケア」は、子どもと高齢者の医療の現場からの提言と、安楽死といった医療における倫理の問題を研究している研究者の論考から形成されている。

子どもにおいても、高齢者においても「インフォームド・コンセント」の難しさや、疾患にだけ焦点を当てるのではなく、その子、その人の全体を配慮することの必要性が指摘される。また子どもの場合には、医療の「正常な発達」という子どもへのまなざしがはらんでいる問題が提起される。こうした医療現場からの提言に続いて、「ケア」を「する側」と「される側」の二者間の共同行為としてではなく、共同体のネットワークの中でなされていることの一角として捉え、社会全体が責任を負うような社会体制への移行の必要性が論じられている。

第II部の「看護とケア」においては、看護の現場経験者からの提言と、ケアの現場、なかでも看護に着目した「臨床哲学」者からの論考が展開されている。

看護におけるケアとは、人間の自然治癒力や「よく生きる」という価値観に根ざした、人間らしさへの感覚を大事とする実践知としての営みであるべきであること、しかし実際の現場の看護師たちは、感情労働のなかで何も感じられなくなり、自己喪失状況に陥ってしまう状態にあるという。そしてこうした訴えを社会的な次元へと開いていく術としての「臨床哲学」が展開されている。

第III部「介護とケア」は、老人介護の現場経験者からの提起と、娘の介護経験やジェンダーという視覚を通しての論考から成っている。

介護の本質は人間が互いに求め合う関係としての「エロスの関係」であり、顔の見える介護を支える制度が必要であること、そうした制度の根本にあるのは、「世話をせねばならない」というような命的な義務ではなく、たとえいやいやながらであるとしても、自ら世話へと招かれる、非拘束的な「内発的義務」であるという。こうした介護観のあとに、現実には負担の大きい介護を担っているのがもっぱら女性であり、何が女性を介護に拘束するのか、その社会的な仕組みが描き出されている。

第IV部「生命倫理教育の反省」は、大学の医学部、医療技術の短大および高校において生命倫理やケアについての講義担当者による論考であり、スタンダードな生命倫理学の教科書の枠を超えることが目

指されている。

生命倫理は非専門家が医療について語ることにその始まりがあり、医療と社会倫理をつないでいくためには、医療の専門家に届き、当該の問題に対する政策的対応を要求しえるような言葉を発見していくことが必要であること、障害者など「ケア」を必要とする人が堂々と生きていける社会のあり方を開くために、自分のつくったものは自分のものになるという現代社会の前提への疑義と相対化の提起、尊厳死や出生前判断といった生と死の問題群において「是非を問う」ということが孕んでいる権力作用や、そこから抜け出るための方途として、無力で醜く弱い「私」を私自身の中に見出していくこと等が提起される。

I～IVの各テーマとも、実践者と研究者双方の論考が配置され、それぞれのテーマ毎に問題の広さと深さを感じさせられる。しかしその一方で、それぞれのテーマ内での論考を関連させていくことが難しく（編者はむしろそれを意図していたようであるが）、スケジュールみっちりのバック旅行のように、それぞれの論者に「ケアと社会のインターフェイス」を次々と引っ張りまわされる感がある。ただ、引っ張っていかれた先で、こういう問題があるのかと、毎回目を開かされることも事実であり、エネルギーに満ちた論考に、「ケアの社会倫理学」が今後大きく展開していくことを予感させられる。

なかでも圧倒されたのが、第7章の三好の論考と第8章の最首の論考である。例えば介護の現場の只中にある三好は、介護の現場は「人間の上澄み」をすくった“ヒューマニズム”が謳う人間像ではやっていかれず、「ウンコ、シッコの臭いのする人間像」に基づいた理論が必要なのだとし、障害を抱えた娘の介護を担う最首は、「湯船の内外を問わず、おしっこは大したことではない。うんこは場合によっては大変だ。生理はその事実よりも、歴史が顔をだして心にざわめきやさざ波がたつ」と言う。そしてそれでもケアするように招かれると言うのである。それ

ぞれの論考の基底にある、存在を肯定していこうとする姿勢に魅かれて、やっぱり「ケア」は大切だ、などと安直に思っていると、見事にべったんこにされる。ムード先行の「癒し」ブームのなかで、ふわふわと浮いている「ケア」という言葉が、ずっしりと降りてくる。

ケアを提供するべき者として

本書を読み終えて、果たして評者自身がどの立場からこれらの問題に向き合えばいいのかと考えた時、「健康」で「女」である評者は、やはり「ケアを提供するべき者」としての立場から読むことが適当だと思う。この立場から本書をもう一度読み直してみた時、「ケア」というものが非常に個人的な関係性のなかで成立するものであるということに気付かされる。だとすると、本書の中で提起されている事の一つにもあるように、ケアを「する側」と「される側」に区別するのではなく、社会全体で担っていかうとした時、そこにはどんな社会があるのだろうか。その社会のなかで評者は何をしているのだろうか。女ばかりのボランティアの一員として何等かのケアに関わっているのだろうか。「ケアの社会倫理学」の今後の展開のなかに、その方向性が見られることを期待している。

しかし何より、新自由主義が席卷し、確かにある種の活力はあるものの、何となく殺伐としたものを感じる今日の社会状況の中で、本書が開いて見せてくれた、人と人との関係性を大事としそれを支える、今日の社会とは全く別の社会があり得るのだという可能性に勇気づけられる。そして、10年前の阪神・淡路大震災の時、テレビの中のボランティアの人々の姿に、「なぜお前は動かないのだ」と告発されているかのように、いたたまれない気持ちにさせられた当時の社会状況や評者自身を、やっと相対化して考えるための視角を本書から得ることができたように思う。